雄大な構想に注目

農の思想と共生概念の探求

鈴木　正

多元的共生社会が未来を開く

尾関　周二著

『思想の科学』のプルーラリズムを視点にして他人の研究や事実から直接学んできた私にとって、本書のタイトルはとても気に入っている。若いころは党派本位の一元的思考だったが、結核の療養所生活を経験して、いろいろな階層の人たちとさまざまな考え方に触れて多元的な物の見方に変わった。

著者は「共生」こそ地球環境問題に象徴される人間―自然関係や異文化対立にみられる人間―人間関係の問題を抜本的に解決することをめざす方法だとみている。そして日本という場で、これを構想する時、その理由を「日本国憲法の第9条の戦争放棄（非暴力）という徹底した平和主義・平等主義を基調とする基本的人権、国家権力に関係しての主権在民といった、いわゆる憲法三原則を基礎にして展開されねばならない」と、人類史・世界史的観点から解明しようと試みている。

本書は「Ⅰ共生の思想と現代」「Ⅱ共生の理念と〈農〉の思想」「Ⅲ人類史・世界史の新たな視座の探求と共生概念の意義」「Ⅳ近現代文明の危機と共生社会へ向けて」の四つのテーマで構成されている。

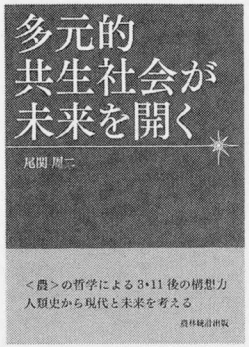
注目点は二つだ。一つは農の思想、もう一つは共生概念の探求である。これらの構想は雄大である。「農」についていえば、「第一の人類史的転換――一万年前の『農業革命』と文明社会へ」という、とてつもない永いスパンで捉えていることからも容易に判るだろう。文明社会と国家の成立については、その政治的・精神的基礎に触れて、ハーバーマスの「正統な権力」でとりあげられている共通の祖先から共通の支配者による権力が具現される点を強調した点に注目したい。

われわれにとって最大の関心事は「近代文明社会への第二の人類史的転換」（Ⅲの第7章）だ。この転換の諸要素として科学革命、工業化、資本主義、国民国家をあげ、フランス革命の世界史的意義について、『人権宣言』の第1条に掲げられた「人間は生れながらにして、自由であり、権利において平等である」とのべている。実質的平等でなく、権利において平等という場合、平等という人間存在の価値が問われ、当然競争の契機を含んでいる。

さらにフランス革命を「ブルジョア革命」にとどまらない、都市民衆の革命、農民の革命という複合的な性格をもった革命だという判断も極めて重要だ。そして「法の前での平等がなければ、自由とは事実上、力の強い者だけのために、もう一つの特権をプラスすることになってしまうだろう。一七八九年のフランス人にとって、自由と平等は不可分であり、いわば一つの同じことを二つの言葉で表現したようなものである。もしも彼らが強いてどちらかを選択せねばならなかったとすれば、彼らは何はさておき選び取ったであろうものは平等の方である」という革命史研究者ルフェーブルの指摘は革命の性格を深く捉えている。

最後にとりあげたいのは、Ⅳの第8章「3・11原発大震災が暴露した近現代文明の問題性」だ。この文明はもっぱら科学技術によったエネルギー利用で生態循環から逸脱し、農村を都市（特に大都会）に従属させて住民の生活の場である「公共圏」を形骸化してしまった。3・11は科学技術偏重の「自然の支配」という自然観（その極致は原発だ）を「自然との共生」へ変えること。いいかえればそこで成長主義社会から共生持続社会へ移行させる人類の生存がかかった大転換の意義が順順と説かれている。そのために労働運動とともにディーセント・ワークという人間的な働き方で、自由時間を拡大させるとともに、ベーシック・インカムで、最低限の生活を送る一定の所得を無条件に保証する生存権所得が絶対必要だろう。私は本書から大杉栄のいう「生の拡充」につながるさまざまなことを学ばせてもらった。（すずき・ただし氏＝名古屋経済大学名誉教授・日本思想史専攻）

★おぜき・しゅうじ氏は東京農工大学名誉教授・共生社会システム学会会長。一九七七年、戸坂潤賞受賞。一九四七年生。



A5判・174頁・2000円
農林統計出版
978-4-89732-330-5